書評

山崎一穎著『森鷗外・歴史文学研究』

小泉浩一郎

山崎一穎『森鷗外・歴史文学研究』（平成一四・一〇　おうふう）が出た。数多くの山崎氏の鷗外関係書のうち、主著ということになると、『森鷗外・歴史小説研究』（一九八一）及び『森鷗外・史伝小説研究』（一九九一）に次ぐ第三著である。本書は、森鷗外の名を冠してはいるが、「歴史文学研究」という呼称が示すように、その内実において、鷗外の歴史小説・史伝と近代日本の歴史テクストとを共々に相対化し、鷗外の歴史小説・史伝の個性を浮び上らせようとしている点、氏の鷗外研究の一つの到達点であると共に、新しい研究の展開への出発点をも併せ示している。そういう意味合いをも込めて、注目すべき著書と言って良いだろう。

×　×　×

本書は序跋を除き、第Ⅰ部から第Ⅳ部に及ぶ四部から構成されている。第Ⅰ部は、それ自体が「歴史叙述と文学」の単一論文であり、第Ⅱ部は「『興津彌五右衛門の遺書』（初稿）覚書」「『阿部一族』論――歴史の「自然」と歴史叙述――」「『佐橋甚五郎』攷」「『堺事件』論――組織から弾かれた個――」「『最後の一句』論攷」「『高瀬舟』試論」「『寒山拾得』論」の七篇の作品論から成り、第Ⅲ部は「〈天保騒動〉の系譜的考察――歴史と文学との交叉(1)――」「〈黒田騒動〉の系譜的考察――歴史と文学との交叉(2)――」の二論より成り、第Ⅳ部は「鷗外から渋江保宛書簡――『渋江抽斎』〈その百十二〉の読解のために――」「『伊澤蘭軒』の研究史素描」「『伊澤蘭軒』の本文形成過程の復元の試み」「井伏鱒二から鷗外宛書簡――『伊澤蘭軒』〈その三百三〉の読解のために――」「『北條霞亭』に於ける情報ネットワーク」の史伝関係五篇より成る。以下各部の主要論文を中心に紹介、併せて私感を記すことによって、書評に代えたい。

×　×　×

「第Ⅰ部　歴史叙述と文学」において氏は、日本近代における歴史テクストの生成と展開を追い、歴史と文学を巡って浮上する諸問題に照明を与えているが、それらを簡潔に要約することは至難である。一先、中見出し項目を列挙することで構成を一瞥すると「序」「文明史論に見る歴史叙述」「歴史学の成立」「久米邦武事件」「文学改新の一側面」「民友社の史論に見る歴史叙述」「伝記と自伝」「〈伊達騒動〉の系譜」「三つの由井正雪像」「鷗外の歴史・史伝小説に於ける歴史叙述」と言うことになり、構想の雄大、着眼の独創、博捜の周到など感嘆の語は無数に出るが、それぞれの問題における個別具体相への徹底から浮んでくるものは、文学テクストと言うより歴史テクスト及びそのディスクールへの氏の関心の深まりである。これは、加齢に従って〈歴史〉研究者としての氏の本来の資質が立ち現われてきたものではないか、と思われるのであるが、同じく齢を重ねるにつれ、文学テクストの独自な空間性への関心を深めつつある筆者にとっては、意外な発

見であった。しかし〈歴史〉の語を「考証」の語に置き換えれば、晩年の鷗外にとって文学と歴史の収斂する場が〈考証〉であったことと相似するが、なお氏における文学テクスト離れの問題の行方には、筆者として一抹の危惧を禁ずることができない。ともあれ、本篇は本書中随一の力篇であり、アクチュアリティにおいて、他の本書所収諸論の追随を許さぬものだ。先に「離れ」の語を不注意に記したが、例えば鷗外の現代小説「かのやうに」における、明治末年における〈神話〉と〈歴史〉の対立という状況認識の光鋭性への言及が抜け落ちているのは、決して偶然ではないと思うのである。

第Ⅱ部所収七篇のうち「興津」論において氏は、乃木事件をめぐる諸新聞の報道の実態を精査し、初稿成立の状況的背景を明らかにし、又、「佐橋」論においては、尾形仂氏の出典研究を更に推し進めて、尾形氏の見た『続武家閑談』の別の処（巻十三）において、作品の直接的典拠を発見するという鮮かな逆転劇を演じている。快心の論と言えよう。この論は、先の〈考証〉家としての氏の一面の最も優れた発露に違いない。ところが、「阿部一族」「堺事件」「最後の一句」等への論及になると、先の筆者の危惧がモロに現実化する。これらの作品研究においては、出典追求は既に完結（「阿部一族」においても原本の出現はまだだが、藤本千鶴子によって、ほぼその原形は復元ズミ）、もしくは当初より出典は明白であった。残るは史実の復元だが、既に歴史の領域に属するこの分野でも、藤本千鶴子や大岡昇平、井田進也等による一連の追求がほぼその全貌を明らかにしている。つまり、歴史や考証の立ち入る間隙が極めて限られてくる。残るは、作品本文のヨミの領域である。この領域において、筆者は過去二十年来最も腐心してきたのだが、その結果は、それぞれの作品論となって学界に公表され、単行書未収の「最後の一句」論を含め、筆者としては、ヨミの到達点として、今も現役中の現役だと思うのだ。同時にそれらは作品本文のヨミに関わる先行説の集大成でもあった筈だ。これら筆者の論を含む、先行説との対話が、氏の諸論では決定的に不足なのである。一歩進めて言えば、取捨において不公平でもある。結果として、「阿部一族」や「堺事件」の主題は「組織と個との確執」にあると指摘されていても、先行説所出枠組のくみかえに過ぎず、何らヨミの深化に寄与していない。「最後の一句」論において、主人公いちの最後の一句を「反語」と初めて規定した筆者の見解に対して、その前提として批判ずみの長谷川泉説の受け売りに過ぎない（それと断ってはいないが）藤本説の「（奉行の判断の正当性への）ダメ押し」説を「反語」説の先駆としてあげるなど、明らかな論理的破綻であろう。以下、語を差し控えるが、文学言語の分析には、考証の努力とは別種の感性の錬磨と、私意の捨象のための自己（主観）相対化への修練が必要なことは言う迄もない。そして、考証家山崎氏には、文学テクストという〈他者〉に対する、この自己（主観）相対化への不断の努力が決定的に欠けている、としか思われないのである。先に「危惧」と記した所以である。以下の作品論においても、私は遂にヨミにおける氏のオリジナリティを何ら発見することができなかった。

これらに反し、第Ⅲ部所収二論は、まさに「雄篇」（「やまなし

文学賞表彰式」所載「選評」のうち、高橋英夫氏）の称にふさわしい。山崎氏は、近年の歴史学における大塩研究の著しい進展を踏まえつつ、過去から現代に至る大塩関係テクストを網羅し、その中に鷗外作品を組み込み、その限界をも指摘した上で、未だに「小説」と「歴史」とが分裂している大塩像の統一を創作の現場に要請しているのだが、この統一的大塩像への期待は、反面、氏の夢でもあろう。そのような統一的大塩像の樹立が可能か否か、又、統一そのものが望ましいか否か。――ここでは、鷗外「大塩平八郎」における認識者大塩と行為者大塩の分裂に向けられた鷗外の批判的なまなざしのアクチュアリティをのりこえることは、今後においても恐らく至難であろうとの予感をのみ、鷗外の側に立って記しておくことにする。

「〈黒田騒動〉の系譜的考察」には、そのような氏の夢がない分、安心して読める。詳細は省くが、考察の手続きは〈天保騒動〉をめぐるそれと同軌であり、文献的実証主義者としての山崎氏の考証的力量が過不足なく発揮された安定した好論と言うを吝まない。

「第Ⅳ部」の柱が、「『伊澤蘭軒』の本文形成過程の復元の試み」にあることは再言する要があるまい。筆者も氏の労を多とするものだが、『蘭軒』研究は、漸く緒に就いたばかり、という氏の感慨に賛同する。抑も『蘭軒』という作品は、論文というスタイルになじまない処がある。むしろ、氏も指摘する如く本格的な注釈の出現こそ待たれているのである。なお、本論における東京大学森鷗外文庫蔵諸史料の翻字には、一部にかなり誤りがあるように察せられる。手元の手写史料との比較を記して、後考を俟ちたい。本文三三四頁八行「十日の新聞に見之申候」は「十日の新聞に見え申候」、同十四行「不業寒粟満身生」は「不禁寒粟満身生」、同十六行「有声之上の字磧のやうに候」は「有声之上の字　磧　かやうに候」、三三五頁一行「見当り不申候間」は「見当り兼申候間」、三行「早々」は「草々」、四行「三村清三郎、」は「三村清三郎拝」（以上、三村清三郎書簡）、同十五行「歳八十歳」は、「歳八十齢」、十六行「筆法ハ筆鋒ヲ丸ク一二度回シ為書」は「筆法ハ筆鋒ヲ丸ク一二度回シ而書」、三三六頁一行「歯痛肩凝等ハ全以テ不知」は「歯痛肩凝等ハ今以テ不知」、二行「大阪ニ滞留」は「大阪ニ帰留」、二～三行「八十一歳ニテ大坂デ男子為改候」は「八十一歳ニテ大坂デ男子為得候」、六行「私幼年頃家而てノ夜話ニ聞取候」は「私幼年頃家兄ノ夜話ニ聞取候」（以上、清水右衛門七書簡）などである。無論、この中には筆者の誤読も多々あろうが、一考を乞う。

「『北條霞亭』に於ける情報ネットワーク」にも氏の力倆は鮮かだが、こちらの研究状況は近年の岩波書店「鷗外歴史文学集」巻十～十一における『北條霞亭』上下に付された小川康子注が鷗外文庫蔵出典史料への言及も含むので、事項注に力点を置いた同六～九巻の『蘭軒』注より、やや進んでいるとは言えよう。

他に『抽斎』関係のものとして渋江保宛鷗外書簡の発掘、紹介、並びに『蘭軒』関係のものとして井伏鱒二書簡の発掘や井伏の偽書簡事件への言及の変化の究明がそれぞれ興味深い。「『伊澤蘭軒』の研究史素描」の文献紹介は、公平で便利である。但し、

戦後『蘭軒』再評価に一期を画した篠田一士『傳統と文学』所収『蘭軒』論が落ちているのは惜しい。

× × ×

本書は平成十四年度やまなし文学賞を受賞している。その「選評」で、高橋英夫・平岡敏夫・十川信介三氏が、共に本書所収諸論、とりわけ〈天保騒動〉〈黒田騒動〉関係二論を授賞理由として挙げているのは偶然ではない。私も、本書の価値の明証として、ここに「第Ⅰ部　歴史叙述と文学」を付け加え、大いに祝意を表したいと思う。妄言多謝。（二〇〇三・二・一〇、未明。）

（二〇〇二年一〇月　おうふう　A5版　三七九頁　八八〇〇円）

新刊紹介

田中善信著

『書翰初学抄―江戸時代の手紙を読むために―』

本書は、寛文九年（一六六九）に刊行された『書翰初学抄』を影印したものである。

『書翰初学抄』は、もともと江戸時代の武士階級の人々の利用を想定して作られた書簡文例集で、当時の需要は高く、何度も版が重ねられた。本書では、それを「文字を読むための手引書」として活用するために、「解説」「読み下し」「語釈」が付されている。

例文には書簡特有の、いわゆる「決まり文句」が多く、田中氏が上達に不可欠と述べる「臨模」をしながら本書一冊を集中的に学習することにより、文字を読む能力は確実に向上することと思われる。

なお、本書は近世文学研究を志す人々を主たる対象として編まれたものであるが、書簡を材料にしているため、中世文学研究や日本史研究などを志す若い人々にも有益な一冊となろう。

（二〇〇二年七月　貴重本刊行会　A5判　一七四頁　一五〇〇円）　〔金子俊之〕